

衣服・布づくりと人間の自立についての研究:インドネシア・アチェ州の事例調査
Study about the Relation Between Clothes- and Cloth-making and Human Independence:
The Case Research of Nanggroë Aceh Darussalam

松本 由香^{*1+}, Herawati binti Muhammad Zain^{*2+}, Syafwina^{*2*3+}
Yuka Matsumoto^{*1+}, Herawati binti Muhammad Zain^{*2+}, Syafwina^{*2*3+}

*1 高知女子大学生生活科学部 高知県高知市永国寺町 5-15
Faculty of Human Life and Environmental Science, Kochi Women's University,
5-15 Eikokuji Town, Kochi City, Kochi Prefecture, Japan

*2 Faculty of Education, Syiah Kuala University

*3 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士後期課程
Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学
Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture
Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

Abstract: The purpose of this study is to make clear what the meanings and what the power clothes- and cloth-making have. This study takes up clothes- and cloth-making in Province of Nanggroë Aceh Darussalam, North Sumatera in Indonesia. This study is examined from the data of the interviews with the people who make clothes and cloth in Banda Aceh and Great Aceh in July and August 2009, and in Banda Aceh, Central Aceh and West Aceh in December 2009. Clothes- and cloth-making have been done by the women in each family since the old days. After the disaster by Tsunami in 2004, people became to have the hope and to feel pleasure by clothes- and cloth-making in the big change of their life environment. The administration of the province sends the women to the dress-making and embroidery classrooms and encourages the women to do the work of dress-making and producing handicrafts. It means that the administration suggests their wholesome life, manages their lives and creates fashion industry and new business. Mixing the areal cultural elements, re-creating new culture of the province and appealing 'Aceh-ness' eagerly can be recognized in the field of clothes- and cloth-making in Acehnese society.

I はじめに

衣服づくり・布づくりが、人間にとってどのような意味をもつのか、どのような力をもつのかを明らかにすることを、本研究の目的とする。事例として、インドネシア・スマトラ島北部のナングロ・アチェ・ダルサラーム州での衣服づくり・布づくりをとりあげる。

アチェは、2004年12月に州全体で約20万人が犠牲となったスマトラ島沖地震の被災地として知られる。このアチェは、インドネシアで最も古く9世紀にイスラーム教国が栄えた地であり、イスラーム慣習法(シャリ

*1) yukamat@cc.kochi-wu.ac.jp

ア・イスラーム Syariat Islam)が、現在までアチェの人々の重要な生活規範となっている。トルコ、インド、中国の文化的影響を受け、17世紀にマレー半島にまで及ぶ王国として栄えたアチェは、19世紀末、オランダ軍とのアチェ戦争で荒廃し、1970～1990年代には、当時のスハルト大統領政権によるアチェの独立運動(GAM 自由アチェ運動)制圧、住民の弾圧・虐殺という陰惨な歴史を経てきた。しかし2004年の被災後、海外支援を受けて復興が進み、急速に国際都市へと変化を遂げてきている。

現在アチェ州には、オーストロネシア語族に属する主に5つの異なった民族、すなわちアチェ人、ガヨ人、アラス人、アヌク・ジャメー人、タミアン人が居住し、それぞれの居住地が行政区分とほぼ重なり、服飾においてもそれぞれが民族的特徴をもつ。2009年度には、州都バンダ・アチェおよび北部・南部海岸地方のアチェ人と、中部アチェのガヨ人の居住地においてフィールド調査を行った。本調査報告では、①調査を行った各地および各民族の衣服・布づくり・服飾工芸の種類と分布を明らかにし、伝統的生産と現在の生産状況についてまとめる。次に②各地の人々の服飾・衣生活に、伝統文化、イスラーム文化、西欧の文化的要素がどのように位置づけられているのか、ジェンダー観とかかわらせて、ファッション・おしゃれの感覚がどのように位置づけられているのかについて考察する。さらに③震災や政治的制圧という社会的リスクの下で精神的負荷を負った人々にとって、衣服・布づくりがどのような意味をもつのかについて考察する。

II 方法

本研究の考察を、次に述べる2009年に2回行ったフィールド調査で得られた資料から導く。

第1回:2009年7月22日～8月11日(高知女子大学生生活科学部長留保金で松本とZainが実施)

アチェ人の居住地域であるバンダ・アチェおよび大アチェ県で、衣服・布づくり、服飾工芸にたずさわる人々にインタビュー調査を行った。また8月2日～11日までバンダ・アチェで開催されたアチェ文化祭PKAでの資料収集、8月8日にシャー・クアラ大学教育学部で開催されたアチェの衣と食に関するセミナー^{*4}での研究発表の資料収集を行った。

第2回:2009年12月7日～24日

(文化ファッション研究機構研究費で松本とZainが実施^{*5})

アチェ人の居住地域であるバンダ・アチェ、ピディ県、ピディ・ジャヤ県、ロスマウエ、西アチェ県、アチェ・ジャヤ県と、ガヨ人の居住地域である中部アチェ県、ブヌール・ムリア県で、衣服・布づくり、服飾工芸にたずさわる人々14人に調査票を用いてインタビュー調査を行った。また12月19日に西アチェ県ムラボで開催されたイスラーム女性の衣服について考えるセミナー^{*6}での研究発表の資料収集を行った。



図1 刺繍するアチェ人女性

Fig.1 Acehnese woman who embroiders

^{*4} セミナーのテーマは‘Ekstensi Potensi Daerah Kreasi Sandang dan Pangan’ (『衣・食生活の創造における地方の可能性』)で、松本は、“What is the meaning of making clothes and textiles”, Zainは、“Tenunan Aceh dalam Tantangan Masa” (『アチェの織物の現代への挑戦』)のテーマで講師を務めた。

^{*5} 本調査をインドネシア政府研究技術省RISTEKの調査許可(No.0279/FRP/SM/XII/09)により行った。

^{*6} ‘Seminar Nasional, Penerapan Busana Islami di Bumi Teuku Umar’ (『トウク・ウマルの地におけるムスリム女性の衣服についての国立セミナー』)

III 結果と考察

1. 各地の衣服・布づくりと服飾工芸

2009年の調査地と居住する民族、行われている服飾工芸の種類、また特に2009年12月の調査票によるインタビューの居住地について、次の表1にまとめる。

アチェ州各地で行われている衣服・布づくり、服飾工芸の種類は、ソンケット(songket 緯糸紋織)、縞織、バティック(batik ろうけつ染め)、ボルディール(bordir ミシン刺繍)、シュラム(sulam 手刺繍)、クピア・リマル編み(kupiah rimar 椰子葉脈編みの男性用帽子)、ティカール(tikar 棕櫚で編んだ敷物および日用雑貨)、衣服(洋裁)、かばん(ボルディールによる)、サンダル(ボルディールによる)である。

表1 各地での衣服・布づくり、服飾工芸の種類

Table1 Clothes- and cloth-making in each district, and the kinds of handicrafts

| 調査地 | 民族 | 服飾工芸の種類 | インタビュー |
|-----------|------|--------------------------------|-----------|
| バンダ・アチェ | アチェ人 | ソンケット、バティック、ボルディール、シュラム、衣服、かばん | 女性4名 |
| 大アチェ県 | アチェ人 | ボルディール、衣服、かばん | |
| ピディ県 | アチェ人 | ボルディール、シュラム、クピア・リマル編み、衣服、かばん | 女性1名 |
| ピディ・ジャヤ県 | アチェ人 | ティカール | 女性1名 |
| ロスマウエ | アチェ人 | ボルディール、かばん | 男性1名 |
| 西アチェ県 | アチェ人 | 縞織、シュラム、衣服 | 女性2名、男性1名 |
| アチェ・ジャヤ県 | アチェ人 | ソンケット | 女性1名 |
| 中部アチェ県 | ガヨ人 | ボルディール、かばん、衣服 | 女性3名 |
| ブヌール・ムリア県 | ガヨ人 | ボルディール、サンダル | |

2009年度には、アチェ人とガヨ人を調査対象にした。これら2つの民族は、それぞれ外来と先住、低地民と山地民、母系社会と父系社会という対照的な社会・文化的特徴をもっている。服飾文化における顕著な対照的特徴については、アチェ人は裁断縫製する体形型衣服、ガヨ人は一枚布型衣服(ウルン・ウルン ulen-ulen)を着用することがあげられ、このことは、それぞれの民族の対照的な社会・文化的特徴と関連していると考えられる。

ガヨのウルン・ウルンには、古くからあったとされる太陽(matanilo)や十字(segi opat)、筍(pucuk rebung)、連続する雲(emun berangkat)などの幾何学的抽象文様がミシン刺繍で描かれる。またウルン・ウルンの色彩は、黒(大地)地に、文様として、黄(王・幸運)、白(司祭・信頼)、赤(長老・印)、緑(人民・日常生活)が用いられ、それぞれの色彩に括弧内に示したような意味が含まれている[1]。オランダの影響により、100年ほど前にはすでにミシンで刺繍が行われていた。このガヨの文様や、木造住居の彫刻による植物の蔓文様が、アチェ人がつくるバティック、ボルディールによるかばんなどに施されている。このことは、イスラーム文化のより強い影響を受けた外来のアチェ人が、ガヨ人がもつ自然環境および生活環境にあるアニミズムの文化的要素を内包する豊かな種類の文様を、参考にしたり流用したりしてきたことを示していると考えられる。

衣服・布づくり、服飾工芸は、州知事夫人が会長を務め、公務員の妻や女性公務員による全国の行政組織、全国手工芸品協議会 DEKRANAS によって保護・奨励されている。DEKRANAS は、工房や工場経営

者の生産を援助したり、各地域の家族福祉運動 PKK を通して、家庭婦人に家事や育児の合間に内職として服飾工芸品を生産することを援助している。特にアチェの特産品としての産業化が、ソンケット、バティック、ボルディールによるかばん生産、ティカールの主に4つの部門で行われている。

ソンケット(緯糸紋織):ソンケットはアチェ各地で古くから行われていたと考えられるが、アチェ戦争や第二次世界大戦で衰退した。大アチェ県のシーム村で、1973年に再興されるようになった。かつて多い時で50人ほどが村で織りにたずさわってきたが、今では10人ほどになっている。この工房近くのミレーク・タマン村のJasmani(ジャスマニ)氏が、2006年に3カ月ほどシーム村で織りを学び、現在、自宅に工房をもっている。ソンケットを絶やさないように、政府およびDEKRANASの資金援助を受けている。

バティック(ろうけつ染め):バティックは、アチェにはない染色技法であったが、1986年に、当時の州知事Ibrahim Hasan(イブラヒム・ハサン)が創出した。津波後に特に生産が整えられ、2006年に、現在のバンダ・アチェ郊外の工房がDEKRANASによって設けられ、アチェ独特の文様であるピント・アチェ(pinto Aceh アチェの扉)、クピア・ムクトゥブ(kupiah meukeutob 男性用帽子)、レンチョン(rencong 刀)などが創作されるようになった。またガヨの笛文や黒地に黄・赤・白・緑の色彩が用いられ、ガヨの伝統的文化要素を流用してアチェらしさをあらわす工夫が行われている。2007年には、DEKRANASが中心となって、ジャワ島のジョグジャカルタにあるバティックの老舗ダナール・ハディの協力を得て、文様や染めを改善し、ジャカルタで「ルモ・バテック・アチェ(Rumoh Batek Atjeh アチェのバティックの家)」のブランド名でファッション・ショーを開催するなどして、アチェのバティックがインドネシアに広く紹介された。

ボルディール(ミシン刺繍)によるかばん生産:津波前から特徴あるデザインのかばんがつくられていたが、2008年に、大アチェ県ムラカに、DEKRANASの工房が設けられると、デザインや生産ラインが整えられてきた。現在25人が工房で仕事をし、縫製してかばんに成形する仕事を行っている。大アチェ県のDEKRANASは約200台のミシンを近郊の家庭に貸し出し、家庭婦人が内職としてミシン刺繍する。できた部品を工房に運び、工房でかばんに成形する。刺繍の文様は、やはりピント・アチェが主であるが、定期的にモデル・チェンジし、カタログ冊子も作成している。

ティカール(棕櫚の編物):ティカールは、古くから各地でつくられてきた。ピディ・ジャヤ県クデ・トレンガデン近辺では、盛んに棕櫚を編んだ敷物、デザイン化したかばん、小物入れ、インテリア用品などがつくられている。これらの製品は、「スク・アチェ(Seuke Aceh アチェ民族)」のブランド名で、婦人手工芸協同組合KOWANKRAによって生産・販売が管理されている。文様は格子、ジャワのバティックの斜め文様、ピント・アチェなどが工夫されてデザイン化されている。

2. 各地の人々の服飾および衣生活

次に、アチェの人々の服飾、衣生活に、伝統文化、イスラーム文化および西欧の文化的要素が、どのように位置づけられているのかについて考察する。現在、アチェの人々の服飾については、主に婚礼衣裳として用いられる民族服と、婚礼以外の公の生活の場で着用されるブサナ・イスラーム(Busana Islam)とに大別される。

(1) 民族服

特にアチェ人の民族服としては、男性が金糸刺繍を施したバジェー(bajee)という詰め襟のオランダ軍服に由来する上衣と、シルー(siluweue)とよばれる西欧型ズボンを着用し、腰にソンケットのイジャ(ija 腰布)を着ける。このソンケットとともに、クピア・ムクトゥブ(帽子)とレンチョン(刀)は、アチェ人固有の伝統文化に

由来するものである。女性もバジューとシルー、腰にイジャを着ける。男性と比較して、女性のバジューには、袖下にイスラーム文化に由来する襷が入り、詰め襟は中国の文化的影響によるものとされる。女性のシルーの形態は、西欧型ズボンと異なり、アシンメトリーの襷が股上部分に組み合わされてイスラーム文化に由来する。現在、これらの民族服は、主に婚礼時の新郎・新婦の衣裳として用いられている。新婦は、手足の甲に、植物染料のヘナで蔓草文様を描く習慣があり、これはヒンドゥー文化の影響による。このようにアチェ人の民族服には、アチェ人固有の伝統文化とイスラーム、ヒンドゥー、中国および西欧の文化的影響が混在する特徴があるといえる。

(2) ブサナ・イスラーム

インドネシア中でもアチェ州だけに、イスラーム慣習法(シャリア・イスラーム)が 2003 年に制定されると、特にイスラーム教義の遵守が生活の中心となった。イスラーム教義は、女性が家庭以外のすべての場で着る衣服ブサナ・イスラミ(Busana Islami)について定めていて、長袖、丈長、ゆったりしたシルエット、詰め襟の上衣と、下衣としてカインカサロン(腰衣)またはゆったりしたズボン、頭にはジルバブ(jirbab 頭布)の着用を義務づけている。

女性たちは教義の範囲内でおしゃれを楽しんでいる。調査票を使ってインタビュー調査を行った女性 12 人からは、11 人が、おしゃれが好きで積極的に、あるいは自分なりに欧米のファッションを取り入れたいと答える一方で、全員が、アチェの女性は、教義にのっとった衣服を着用するべきであると答え、それはアチェの慣習なのでしかたがないと答える人が 2 人いた。教義は、衣生活についてもふれていて、品行方正・清潔に着ることが奨励され、華美ではないが美しく装飾を衣服に施すことを肯定している[2]。アチェの女性はファッションが好きで、昨今のアチェにおいてはグローバルなファッションが浸透し、レギンスの着用や、レースや透ける素材のブラウスの着用が多くみられるようになっている。西アチェ県でもこのような服装が多くみられるようになり、それを女性の服装の乱れと判断した県知事が、2009 年 10 月に女性のズボンの着用、ズボン販売の禁止、違反者には対象となるズボンをはさみで切って処分することを検討するという声明を公表した。このことは地元のメディア^{*7}にとりあげられ、県内外で賛否の論議を生み出すことになり、2009 年 12 月 18 日から 20 日にかけて、ブサナ・イスラミについて考えるセミナーがムラボの県庁で開催されることになった。12 月 19 日のセミナーで、地元の女性スピーカーは、ズボンの機能性・活動性が仕事着として適していることについて語るなど、反対意見が多く出たことから、県知事はズボン禁止条例の施行を断念し、ゆったりしたズボンで丈長の上衣を重ねれば着用を許可するという声明を、セミナー終了後に発表した。

本事例のように、おしゃれ好きのアチェの女性にとって、ファッションは魅力的であり、生活に機能するシャリア・イスラームの許す範囲内で、おしゃれやファッションを楽しみたいと考える女性が多いといえる。

3. 衣服・布づくり、服飾工芸のもつ意味

最後に、衣服・布づくりが、精神的負荷を負った人々にとってどのような意味をもつのか、人々の精神性にどう働きかけるのかについて考察する。

独立運動制圧、津波被害という社会的負荷を受けながら、女性たちは、洋裁、ボルディール、金糸刺繍教室などの服飾工芸教室に通い、技術習得を楽しむことで、心のリハビリを達成し、それらの技術は生計の手段ともなっている。

^{*7} *Serambi Indonesia*紙 2009 年 10 月 14 日付。

災害からの復興が、2005年4月にインドネシア政府財務省とオーストラリアなどの外国の資金援助で設立されたBRR(The Bureau of Rehabilitation and Reconstruction)によって行われてきた。各地で道路・公共施設建設・整備を行い、そのプログラムには、アチェ各地での洋裁やボルディール教室開催事業も含まれてきた。このBRRは、2008年12月に終了し、その後本事業は、政府の援助のもとで、DEKRANASが続けて行っている。2009年の調査時には、行政の資金援助を受けた個人経営の洋裁学校や日本赤十字社などによる洋裁・ボルディール教室が行われていた。バンダ・アチェにある職業訓練センターにも、洋裁とボルディールの教室があり、会社や各地域のPKKから派遣された女性たちが学んでいた。技術を上達させるのが楽しみであるという。

調査票を使ったインタビュー調査からは、衣服をつくること、縫うこと、織りは、楽しみであり、心を落ち着かせてくれるものという話を聞くことができた。つくることの他に、それを教えること、また衣服のデザインを考えることは、自らの考えを表現することで、心を楽しませてくれることと語ってくれた例があった。また服飾工芸は、社会が平和で心が落ち着いていないとできないことであるという話を聞くことができた。縫うことやデザインすること、服飾工芸の仕事が、心の支えとなって、生活を立て直す力になってくれたという。また洋裁や刺繍を習得し、洋裁店などに就職し、縫うこと、織ることが、生計の手段となったことや、家族の協力を導き、家族の生活改善を導いたことについて話を聞くことができた。

IV おわりに

衣服づくり・布づくりは、もともと各家庭で女性が行ってきたことであり、津波による生活の大きな変化の中で、生き甲斐や楽しみとなってきた。縫うこと、織ることは心を落ち着かせ、生きる支えとなり、人々に平和であることを再認識させることにつながってきた。PKKからDEKRANASや政府援助による洋裁教室・ボルディール教室へ、家庭婦人が派遣され、服飾工芸にたずさわるように奨励されることは、行政が、健全な生活の営みをうながすことであり、人々の生活面を管理することであるとともに、服飾工芸をビジネス化、産業化することでもあるといえる。

DEKRANASが、PKKを通して家庭婦人を組織化し、各家庭での内職から地域の特色あるビジネス・産業を創出しようとする背景には、衣服づくり・布づくりからは、イデオロギーが生み出される心配がなく、政治的不安定を生み出す要因が含まれていないことがあると考えられる。逆に、男性が、仕事の後、夜集まって行ってきた伝統舞踊・音楽などの場では、政治的イデオロギーが生み出される可能性があり、2000年代前半まで、そのような集会は取り締まりの対象になってきた。

地域の伝統的なモチーフを整え、染織を再興し、現代生活に合った服飾工芸を提案することは、全国各地における産業の活性化、特産品の輸出振興をはかろうとする国の方針にも合うことである。アチェ各地の伝統的文化要素を混合して再形成し、アチェ州全体の伝統文化を創出してアチェらしさをアピールすることが、衣服・布にかかわる領域で盛んに行われている。

文献

1. Ibrahim Kadir: *Makna, Pengertian, Pilsafat yang Terkandung dalam Ukiran Ukiran Motif Gayo, Kabupaten Aceh Tengah*: Kabupaten Aceh Tengah Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam, pp.2-8 (2007)
2. Muhammad Suhaili Sufyur Lc MA: *Busana Islami di Nanggroe Syariat*: Dinas Syariat Islam Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam, pp.3-6(2008)